

書籍紹介（1）

Jonathan Kaufman、*The Last Kings of Shanghai* (2020 Viking)

紹介者：林 克好（前駐イエメン共和国日本国大使）

(1)

これは中国の近現代史の大波に、時には乗り、時には飲み込まれた2つのイラク系ユダヤ人ファミリーの物語。上海、香港が国際都市へと変貌する原動力となったバグダード出身ユダヤ人一族の栄枯盛衰をピューリッツア賞受賞ジャーナリストが読ませる歴史書として描いている。

香港の代表的企業、香港上海銀行（H S B C）。その創設はこの物語の柱の一つ、サッスーン一族のドン、ダビッド・サッスーン(1792-1864)のアイデアから生まれた。由緒あるアジアの4大ホテルの一つとして、ポンペイの「タージ・マハール」、シンガポールの「ラッフルズ」、バンコックの「オリエンタル」と肩を並べる香港の「ペニンシュラ」。その創設者はこの物語のもう一つの柱、カドーリー一族の創始者エリー・カドーリー(1865-1944)だ。エリーは、イラクからポンペイ（今のムンバイ）のサッスーン一族の元に渡り、同一族が設立し社員養成学校でアラビア語、ヘブライ語、英語、地理、算数、簿記を学び、サッスーン社の社員としてビジネスマンとしての一歩を踏み出した。

(2)

バグダードのユダヤ人コミュニティの起源は、紀元前597～578年の間に新バビロニアのネブカドネダル王の命令によって3度実行された強制移住「バビロンの捕囚」にさかのぼる。同王はユダヤ人に商業に従事することを奨励しバクダッダの経済を発展させた。紀元前539年にバビロンを征服したアケメネス朝ペルシャのキュロス王はユダヤ人に故国に戻ることを許したが、実際には多くのユダヤ人がイラクに残るか、イラン、ブハラ、ジョージア、シリア方面に移っていったという。著者は、これがユダヤ人のディアスポラ（民族離散）の始まりで、メソポタミアの悠久の歴史を生きたバグダードのユダヤ人コミュニティの人々を「ユダヤ人の貴族階級」と評している。この貴族階級のリーダーがサッスーン一族だった。

イスタンブルのトプカプ宮殿に「バグダードの館 (*Bağdat Köşkü*)」という「あずまや」がある。1638年にオスマン帝国のムラト4世がバグダードをペルシャのサファビ朝の手から奪還したのを記念して建てられた建物だ。サッスーン一族は金、絹、羊毛、香辛料な

どの交易で富を築いたバグダードで最も裕福なユダヤ人ファミリーであった。ダビッド・サッスーンの父は、オスマン・トルコ政府によってバグダードのユダヤ人コミュニティの代表(Nasi)に任命され、トルコ人支配者との関係をマネージしただけでなく、財務的な助言も行った。しかし、反ユダヤ人的なトルコ人支配者がバグダードの実権を握ったことからユダヤ人富裕層への不当な扱いや身代金目当ての投獄行為が行われるようになった。これを是正しようとイスタンブールに直訴したダビッド・サッスーンはかえって自らを窮地に追い込んでしまい、夜陰に乘じてイランのブシェールに逃れざるを得なくなった。一から出直すこととなったダビッド・サッスーンは、その後イランからボンベイに渡り、英国の植民政策に便乗する形で財を成していった。英国人支配階級との関係を構築し、最初はインド綿などがビジネスの中心であったが、そのうち中国へのアヘンの輸出に移っていった。

(3)

ダビッド・サッスーンは、自らの会社に良質の労働力を供給するためにバグダードからボンベイにユダヤ人の若者を呼び寄せ、勉学の機会を与え、その後社員として雇用する教育システムを作り上げた。その学校に入学したユダヤ人の中にエリー・カドーリーがいた。彼はサッスーン社でNo. 3の地位にまで昇進したが、社内のトラブルで退社して独立、香港を拠点にビジネスを開始した。

8人の息子たちをインドから中東、アジア各地に派遣してビジネスを開拓していたダビッド・サッスーンは、アヘン戦争後(1843年)、中国に目を向け、2番目の息子エリアスを上海に派遣した。このエリアスが上海を拠点とした中国でのサッスーン・ビジネス帝国の基礎を築いた。サッスーン社はインドから中国へのアヘン貿易で才覚と力量を発揮し、アヘン貿易を牛耳っていた老舗のジャーディン・マセソンを凌ぐ存在となっていました。ボンベイやロンドンの銀行家から新規のプロジェクトに融資を受けるのに時間がかかり過ぎ、エリアスが上海でのビジネスを迅速に展開できない状況を見たダビッドは、香港にエリアスの兄弟の一人を派遣してライバル会社のジャーディンやその他の会社と手を組み香港上海銀行(H S B C)を設立させた。これにより、各社は中国ビジネスへの融資を迅速に受けられるようになった。

(4)

1920年までに上海は中国経済の中心地となり、大手銀行、工場の半分が集まっていた。その上海を国際都市に押し上げたのがビクター・サッスーン(1881-1961)だった。有能な政治家を自任し、インド議会の議員でもあった彼はマハトマ・ガンジーの躍進は資本家にとって災いをもたらすと考え、資産を中国に移し、上海に投資する決定をした。蒋介石率いる国民党政府を搖るがす激動の時代に入っていたにも関わらずビクターは樂観的であったようだ。国民党政府は上海のユダヤ人実業家ビクター・サッスーンを政治的、経済的に利用しようと接近し、一方、ビクターは大恐慌(1929年)の荒波を乗り切るために国民党政府と手を

組み、中国ビジネスを拡大してサッスーン一族の経済支配を揺るぎないものにしていった。ビクターは上海の外国人居留区外灘（Bund）に当時世界で最も豪華なホテルの一つ、「キャセイ・ホテル」を建設した。このホテルは上海の上流階級、富裕層の社交場となり、その上階はサッスーン財閥の活経済動の拠点となった。

ビクター・サッスーンが上海でのビジネスを強化していた頃、エリー・カドーリーは30年間住んだ上海に代わり、英國の植民地、香港を有望な投資先として考えはじめていた。1920年、香港島のレパルス湾に高級ホテル「レパルス・ベイ」を建設することを決め、10年後には九龍（カウルーン）にペニンシュラ・ホテルを開業した。香港島のビクトリア・ピークへのケーブルカーを運営し、英國籍を取得してから中国電力会社（China Light and Power）の取締役会のメンバーとなった。香港での電力供給はエリー・カドーリーのライフワークとなっていった。著者によれば、「ビクター・サッスーンは、上海はインドよりも安全だと判断したが、カドーリーは、香港は上海よりも安全な場所、少なくとも良いリスク分散先になると考えた」。

（5）

この本の山場の一つは、歐州でのナチス・ドイツの猛威から逃れて上海に続々と到着するユダヤ人難民へのビクター・サッスーンとエリー・カドーリーの支援と占領日本軍との駆け引きである。プレイボーイであったビクター・サッスーンにとって宗教はほとんど意味をもたなかつたが、エリー・カドーリーは孫文にバルフォア宣言の承認を説得するなどシオニズム運動に深く関心を寄せていた。1937年7月に日中戦争がはじまり、北京、天津を陥落させた日本軍は8月、国民政府を降伏させるため上海を制圧した。さらに日本軍は12月、南京を陥落させた。日中戦争が本格化する一方で、1937年末には毎月100人以上のユダヤ人難民が上海に到着する状況となっていた。ユダヤ人にとって上海は唯一ビザなしで渡航できる場所だったからだ。エリー・カドーリーはNY、ロンドンのユダヤ人団体に財政支援を要請したが、上海のユダヤ人ビジネスマンが富裕であることを知っていた各団体は、財政難を理由に上海からの要請に応じなかつた。エリー・カドーリーは意を決して、キャセイ・ホテルにビクター・サッスーンを訪ねた。ビクター・サッスーンはエリー・カドーリーの要請に応じた。英國生まれ、英國育ちのビクターはシオニズムに関心はなかつたが、ナチスをユダヤ人の生存を脅かしかねない脅威と認識し危惧するようになつていて。アジアでは日本の台頭が、サッスーン一族が富を築いた中国、とりわけ上海の安定を脅威にさらしていた。ビクターはチャーリー・チャップリンに連絡し上海のユダヤ人難民のために欧米での資金集めに協力してくれるよう依頼した。チャップリン自身、映画「独裁者」の収入をユダヤ人難民のために寄付した。ビクターはハリウッドの他の俳優たちにも支援を求め、自分自身も難民家族700世帯分の基金を設立した。エリー・カドーリーはユダヤ人居住区（リトル・ウェーンと呼ばれた）に子供たちの教育のためカドーリー学校を開設した。

ビクターと上海駐留日本軍の犬塚大佐との会談は1938年に行われた。犬塚大佐はビ

クターに、ハイリターンが期待できる日本国内や満州での投資を勧めた。ビクターは日本人を信頼していなかったが、犬塚司令官には日本軍将校はキャセイ・ホテルにいつでも歓迎だと伝えた。犬塚大佐は東京に、上海のユダヤ人コミュニティ指導者は親日派に転じたと報告し、上海に到着する、またはすでに居住するユダヤ人を他の外国人と同様に扱い、排斥しないよう進言した。1939年春には上海のユダヤ人難民は1万人に達した。日本軍の意に沿った動きをしないビクターに日本軍上層部内で疑念を持ちはじめる向きが出てきた。1939年8月、日本は上海でのユダヤ人受け入れ停止を発表した。この時点で上海には1万5千人の難民が存在し、さらに3千人が向かっていた。犬塚大佐と日本政府はこの1万8千人を保護することについて同意した。

1941年になると犬塚大佐は上層部の圧力もあってかビクター・サッスーンが対日経済投資を通じて具体的な協力姿勢を示さないことに業を煮やしはじめ、身に危険を感じたビクターは真珠湾攻撃の数週間前にインドに逃げた。真珠湾攻撃があった1941年12月8日、上海駐留日本軍はサッスーン一族やカドーリー一族の資産を差し押さえ、キャセイ・ホテルのビクターの執務室に日本軍が乱入り、犬塚大佐はビクターの執務机に陣取り日本人カメラマンに写真を撮らせた。犬塚大佐がキャセイ・ホテルのボスとなった。1942年、その犬塚大佐が突然転勤、その後日本軍のユダヤ人難民に対する規制が強化され、難民らは上海の虹口区(Hongkew)の1平方マイルの「指定地」に居住するよう命ぜられた。

(6)

ナチス・ドイツの迫害から上海に逃れてきたユダヤ人の保護にそれぞれの役割を果たしたサッスーンとカドーリーだが、戦後の共産主義中国への対応の違いが2つのファミリーの明暗を分けた。上海は1945年8月20日に米軍に解放され、すぐに蒋介石の国民党政府に統治が任せられたが、国民党政府は同市を統治できず、1946年秋には上海から100キロ足らずの地点にまで中国共産党軍が迫ってきていた。ビクター・サッスーンは中国を去る決心をした。エリー・カドーリーの最後を上海で看取った息子のホーラスは、香港にいる兄ローレンスの指示により共産党軍が迫る上海から香港行きの飛行機に乗った。ビクターも1948年11月28日、パンアメリカン機で上海を去った。二人とも再び上海に戻ることはなかった。上海は共産党の手に落ちたことをロンドンのリツツホテルで知ったビクターは「私はインドを見限り、中国は私を見限った」とつぶやいた。

(7)

香港でローレンス・カドーリーは香港の復興に尽くし電力網を拡大した。香港島と九龍を結ぶトンネルはローレンスのアイデアだった。1949年に中国統一を果たした共産主義中国は文化大革命、ニクソン訪中、米中関係改善を経て鄧小平の4つの近代化の時代に入った。その間にローレンスは中国政府から原発用原子炉2基の購入に協力を求められたていた。1978年、ローレンスは鄧小平と会談した。鄧小平はローレンスがリスクを取って投

資を勧めたことを称賛した。

1979年に訪中したマイケル・ブルーメンソール米財務長官は、北京での会談で上海方言で話し始め中国側関係者を驚かせた。上海で2年間難民生活を送り、カドーリー学校に通っていた頃、隣人から中国語を習ったのだった。

ビクター・サッスーンはバハマに向かい、そこに拠点を置いた。一方、ローレンス・カドーリーは香港を拠点に中国の経済発展に貢献した。1961年にビクター・サッスーンが亡くなるとサッスーン一族はビジネスの世界から消えていった。カドーリー一族は今も香港経済の重鎮ではあるが、昨今の香港情勢に鑑みれば、今も物語は進行中ということであろう。